予防のための子どもの死亡検証（CDR）

（CDR：Child Death Review）

三重県提出資料

事業内容

【情報収集】

内　容：令和2年4月～12月までの死亡事例（18歳未満）

収集先：**県内の小児救急取り扱い医療機関や法医解剖医療機関など、計16か所**

【スクリーニング】

情報から予防の可能性があった死亡事例を**個別検証するため、スクリーニング**を実施

【検証】

死因や、それに関係する背景等について、**多機関が連携して、多角的な個別検証**を実施。

【提言】

検証から導き出した**有効な予防策や意見等について、提言。**

主な提言

安全な睡眠環境づくり

・うつぶせ寝などによる睡眠中の窒息事故の防止

・乳幼児突然死症候群（SIDS）の予防策を周知

（参考データ）

SIDSを知っている保護者の割合　92.4%

1歳までうつぶせ寝をほとんどしなかった家庭　85.9%

※令和2年度健やか親子いきいきプランみえ（第2次）に関する取組調査

川遊びの際の安全対策

・安全器具（ライフジャケット等）の装着の啓発

・安全器具の装着の義務化に向けた法整備

（参考データ）

水難事故生存率ライフジャケット非着用者　約4割　　着用者　約9割

※海上保安庁「平成28年海難の現状と対策船舶からの海中転落者の場合」

マルトリートメント（不適切な養育）に陥りやすい家庭への支援

・保健・福祉・教育・医療の従事者による情報共有

・エビデンスに基づいた的確な対応

（参考データ）

三重県内の児童相談所における児童虐待相談対応件数

令和元年度　2,229件

（うちネグレクトに関する相談　440件）

相談しやすい環境づくり

・進路選択など、子どもの人生の節目などに、子どもと保護者が相談しやすい体制の整備

・相談窓口の利用方法の系統的な教示の検討

（参考データ）

三重県における15歳以上の死因　1位　自殺

※平成30年度三重県人口動態統計

ひきこもり実態調査・よりこ相談実績

ひきこもり実態調査

相談支援機関へのアンケート調査

【調査期間】

令和3年1月中旬～2月上旬

【調査内容】

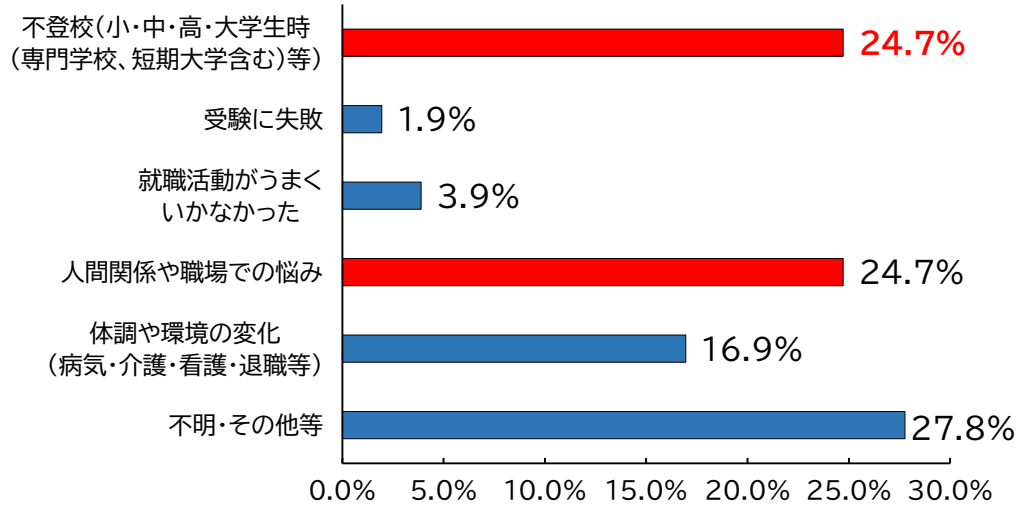
・県内の相談支援機関72（ひきこもり地域支援センター、福祉事務所、生活困窮者自立相談支援機関、保健所、医療機関等）に対して実施

・360ケースの報告（回収率72%）

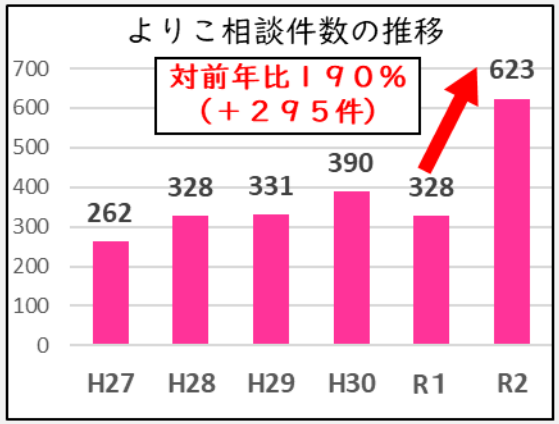
・不登校　24.7%

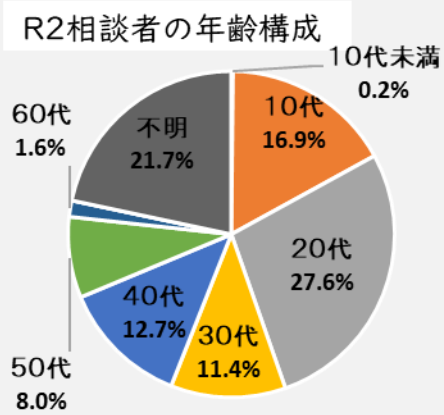
（内訳）	小学生時	4.7%
	中学生時	9.2%
	高校生時	5.0%
大学生（専門学校、短期大学含む）時等		5.8%

ひきこもり状態となった主なきっかけ（回答数＝360）



みえ性暴力被害者支援センター　よりこ相談受理状況





・新型コロナウイルス感染症の影響やメディアで情報発信増加、支援センターの認知度向上等により増加

・相談者の低年齢化（10代・20代からの相談が前年度から約４倍の増）が進んだほか、病院への付き添い等直接的支援が必要な相談が増える傾向

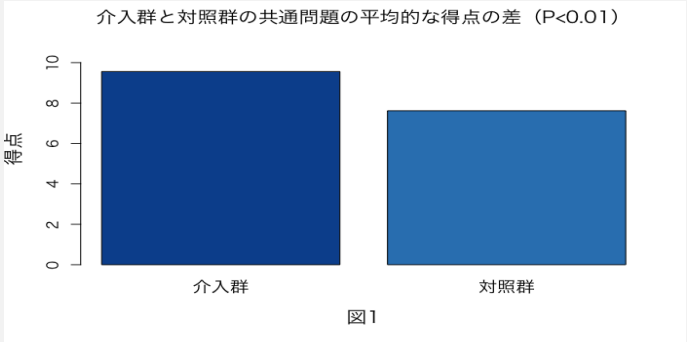
今後求められる対策

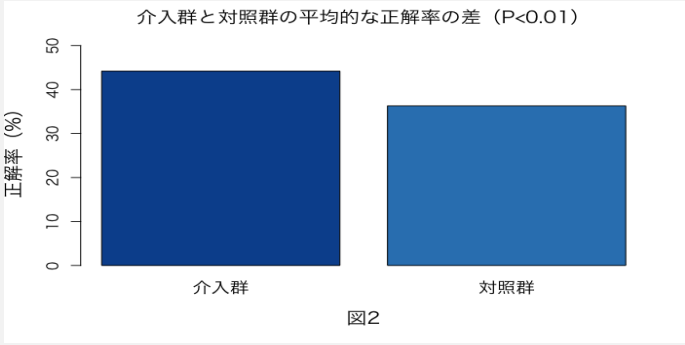
・被害者を孤立化させないためのワンストップ支援センターの機能・体制の強化

・子どもの発達段階に応じた性暴力予防啓発、教育の充実

全国知事会「これからの高等学校教育のあり方研究会」「ICT とAI ドリルを用いた学力への効果検証結果」から

高校１年生（6県8公立高校）を対象に、数学の授業内でAIドリルを利用するクラスと利用しないクラスに分け、ICTとAIドリルの利用が学力向上に資するかどうかの検証について、本県が提案し、慶應義塾大学 中室牧子研究室の検証事業として実施（2020年12月～2021年2月）





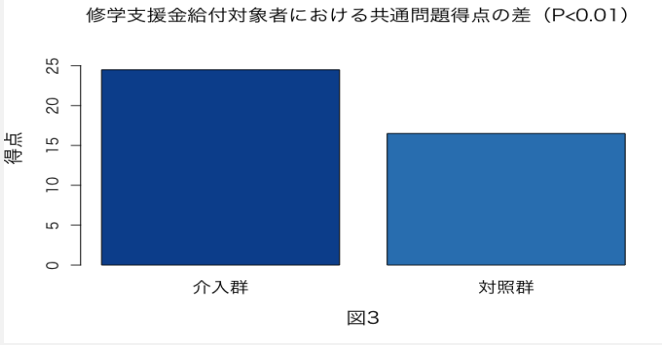


図1：8高校の共通問題（10問）による学力テストの得点の比較
　　⇒介入群の方が対照群よりも約4．5%（1．94点）高い
図2：共通問題（10問）を含めた全20問による学力テストの正解率の比較
　　⇒介入群の方が対照群よりも7．9%高い
図3：高等学校就学支援金制度対象の生徒における学力テスト（共通問題）の得点の比較
　　⇒介入群の方が対照群よりも18．5%（7．51点）高い

介入群…ＡＩドリルを利用するクラス
対照群…ＡＩドリルを利用しないクラス

〇ICTとAIドリルの導入により、生徒の学力を高める効果があった。経済困窮世帯の生徒に特に大きく、家庭の社会経済的状況等による教育格差の是正に有効である可能性が示唆

〇介入群の生徒は「良い学習環境に身を置くことで勉強が身につく」という「環境志向」が統計的に有意に上昇（質問紙調査）

一方、アンケート調査で、臨時休業期間において、ICT環境がない生徒は、登校するか、環境が無いまま学習する傾向があることがわかり、家庭のICT環境の格差が学習状況の格差と関連する可能性

学習環境を整えることが、困難を抱える子どもたちへの支援につながる